タレブ『まぐれ』の要約

寺尾　敦

# 第10章　敗者総取りの法則

人生の不公平さは非線形である．最初の状態において，ほんの少し偶然が味方したり，ほんの少し有利だったりすることで，非常に大きな報いが得られることがある．その一方で，成功者と能力的にはほとんど同じであるのに，まったく報われないこともある．

特定の人や物事が少し優勢になると，不平等さが加速的に拡大し，それらがますます優勢になることがある．そうなると，それらより優れたものであっても，もう勝つことはできない．これは経路依存性と呼ばれている．

われわれの脳は非線形性を扱うようにはできていない．われわれの脳は，原因側の変数が安定していれば，結果側の変数も安定していると考える．しかし，多くの場合に２変数の関係は非線形である．たとえば，学習を積み重ねても成果はなかなか表れないが，突然大きな進歩を見せたりする．

# 第11章　偶然と脳

　私たちの脳は，確率的事象のような複雑な対象に対して，合理的な解を出してくれない．何らかの手っ取り早い方法にとびついてしまう．この章では，こうしたわれわれの限界はどこから来ているのかを議論している．

　われわれの思考は合理的ではないということに，最初に気がついたのはハーバート・サイモンである．日頃からいちいち最適化を行っていたら時間とエネルギーがいくらあっても足りない．だから，だいたい満足のいく近似解が見つかれば，そこで考えることをやめる．人間の合理性についてのこの性質を，サイモンは「限定合理性」と名付けた．

　カーネマンとトヴァスキーは，われわれは近似解を求めているのではなく，合理的思考とは質的に異なったルールに従っていると主張した．こうしたルールは「ヒューリスティック」と呼ばれる．彼らは実験によって人間の持つ多くのヒューリスティックを明らかにした．

　その後の研究で，私たちの脳には２つのシステムがあると考えられるようになった．システム１は，すばやく，並列処理が可能で，無意識的，情緒的といった特徴を持つ．ヒューリスティックはこのシステムの一部である．システム２は，遅く，逐次処理を行い，意識的，論理的といった特徴を持つ．合理性はこのシステムの一部分である．

　進化心理学は，われわれが確率論を理解できずにヒューリスティックに頼るのは，われわれが本来の生息環境で脳を使っていないからだと考える．人類は，多くの世代にわたって，情報がそれほど多くなく，複雑な確率を計算する必要のない環境（つまり，本来の生息環境）で暮らしてきた．そのころに比べて環境は大きく変わってしまった．しかし，われわれの遺伝子は変化していない．進化心理学者は，われわれは合理性を身につけているが，情報が進化的に不適切な形で提示されるために（たとえば，頻度でなく確率が提示されるために），その合理性が発揮されないと考える．

　神経生物学者は，われわれの思考は感情に強く支配されていることを明らかにした．人は情緒がなくては意思決定ができない．合理的思考が求められる場面では，われわれはまず情緒を感じて，それから理屈を考えているのかもしれない．

　どのような学術的立場からも，われわれが確率的に正しく思考できていないことは確かである．裁判，マスコミ，市場といった日常世界では，誤った確率的論理が堂々と語られている．著者は，偶然にだまされないよう，いつも用心している．